《論文》

英語指導プログラム
「アメーバ音読トーク」における一考察

今井康人・浦島　久・濱田英人

1. はじめに

これまで英語教授法について様々な手法が研究開発され、実践されてきました。

日本人特有の生活環境の中で、英語の学習効果が認められる授業法の研究開発において、他国の成功例は必ずしも日本で通用するものではありません。言語環境の違いが大いに影響していると考えられます。また、言語的成り立ちでも英語と日本語には大きな隔たりが存在しています。それは言語に関わる歴史上の違いによるものであり、アルファベットと平仮名やカタカナ、漢字などの文字の成り立ち自体にも大きな違いがあります。

さらに、佐藤（2015）によると、日本の学校教育における英語教育は、主に書き言葉を学ぶことを目標にしているため、基礎的な口語英語の仕組みの理解や運用練習に時間を割かずにリーダーの訳読に進むため、読む力はつくが日常生活でよく使われる表現を学ぶ機会が少なく、自らを表現するために英語を使うことを学ぶ機会も少ないと述べています。

小稿で主張する「アメーバ音読トーク」は、一定の量の英文をリスニング、リーディング、音読を行い、スピーキング活動までつなげる一連の学習プロセスの名称であり、一定の英文（150 – 300 語程度）を学習者が「理解・内在化・発信」という３段階の活動を連鎖的に行うことで、Speaking 力の向上を目的とするものです。

現代の日本人に求められている「英語を話す」活動に重点を置いたものであり、従来の英語の授業よりもコミュニケーション能力の向上につながるもので

す。このことに関して、佐藤（ibid.）は、英語と日本語の違いは極めて大きい。語順の違い、名詞の単数・複数の有無など違いを数え上げるときりがない。そのため英語教師は英語の仕組みに精通するだけでなく、英語と日本語のどのような差違が学習の障害になっているのかをも知っておく必要があると述べていますが、この点からも指導する教員の経験値や年齢に関係なく、誰が使用しても一定の教育的効果が得られる授業方法として「アメーバ音読トーク」を主張します。

そこでまず議論の出発点として、第２節では、脳科学の視点からヒトの言語習得について概観し、英語の習得においてウェルニッケ野とブローカ野に母語の日本語の回路とは別に英語の回路を形成することが必要であることを述べます。このことを踏まえ、第３節から第５節では、小稿で主張する「アメーバ音読トーク」の具体的なトレーニング方法を提案します。続く第６節では、具体的な事例について報告し、提案したトレーニング法の有効性を主張します。第７節はまとめです。

2. 言語を習得するということはどういうことか

ヒトがどのように言語を修得するのかに関しては、脳科学の分野でもかなり研究が進んでいます。それによると、ヒトは右脳で知覚対象を場面との関係で

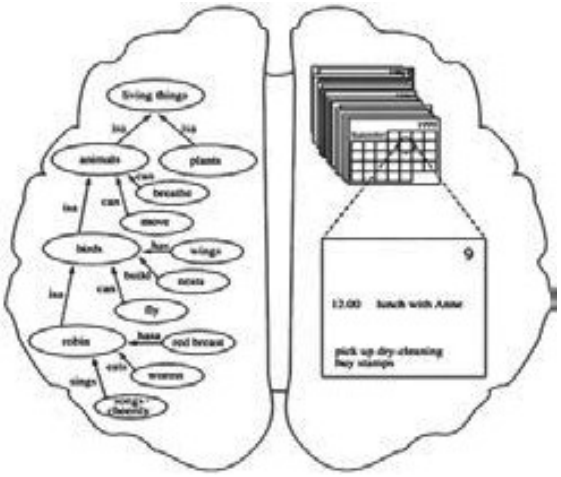


図1　Gazzaniga(2000: 1312)

認識し、周りの言語環境の中で音声と知覚対象との関係を観察しながら両者の意味関係を構築すると考えられています。

この右脳の働きは、Gazzaniga（2000）が「エピソード記憶」が右脳の働きに因ると述べていることからもうなずけます。エピソード記憶というのは、出来事に関する記憶で、対象の情報ばかりでなく、出来事の時間的情報や空間的情報などの複数の要素を統合した記憶です。また、現在の意識状態から時間をさかのぼって過去の情報を意識的に思い出すという内省的なプロセスを伴う心的時間操作もエピソード記憶に含まれています。[1]

このエピソード記憶から知覚対象と場面の関係を理解することが可能となるのは、自己認知やメタ認知を伴うからですが、このメタ認知が右脳によるものであるとして Ramachandran（2011）は次のように述べています。

（1）one job of the right hemisphere is to take a detached, big-picture view of yourself and your situation. This job also extends to allowing you to “see” yourself from an outsider’s point of view.　（Ramachandran（2011: 272））

また、大石（2006）は、これまでの脳科学の研究成果から、右脳は言語が自然に習得される幼児期により多く活性化し、言語処理の左脳優位が安定するのは５歳くらいになってからであり、また、言語機能が右脳優位から左脳優位に移行するのは、年齢とともに言語処理に関わる部位が局所化されるからではなく、認知機能が成長とともに発達し、言語処理に影響を及ぼすからであると述べています。

そして、このことは伊藤（2004）の言語習得に関する主張とも一致します。伊藤は右脳で全体的にことばが捉えられ、事項（item）的なものとことばの社会的場面との関係に関する語用論的調整は右脳で処理されると述べ、構造的、体系的なものは左脳で処理されるが、脳梁を通じて左脳と右脳の情報交換がなされるため、全体的な調整を行いながら言語習得が進行するとして、以下のよ

1　エピソード記憶のメカニズムについては乾（1997）を参照。

うに提案しています。

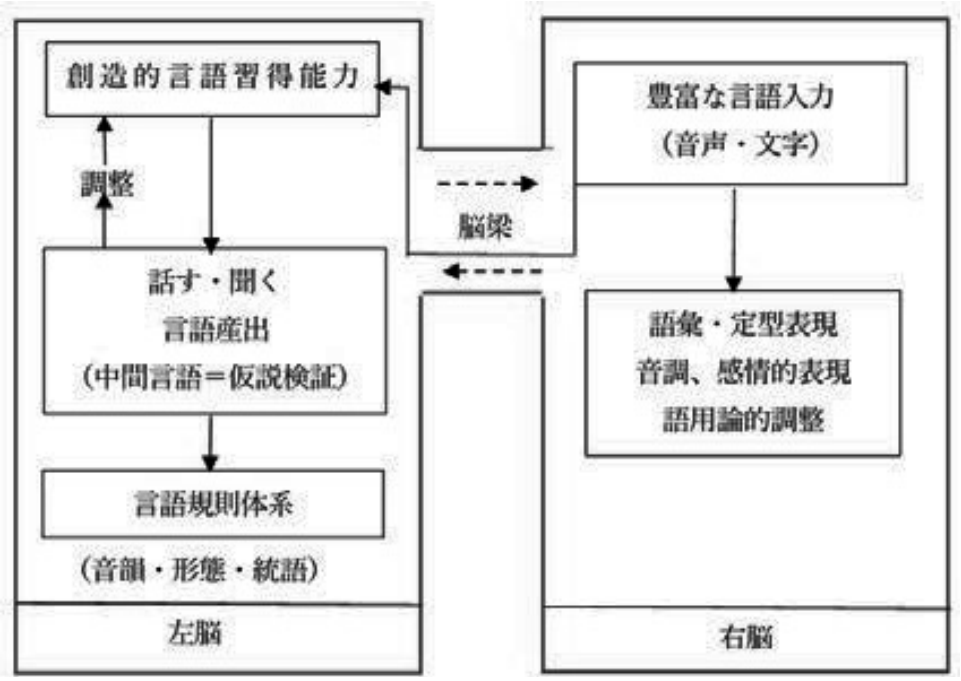


図2　　伊藤（2004: 110）

更に、植村（2009）は、英語を聴いて内容が解る、解らないということがなぜ起こるのかを実験結果から明らかにしています。この実験は、日本人の被験者が日本語のニュースと英語のニュースを聞いて内容が理解できるかどうかを調査したもので、下の図３は英語のニュースを聞いて理解が難しかった被験者の MRI 画像で、図４は英語のニュースを聞いて理解できた被験者の MRI 画像です。

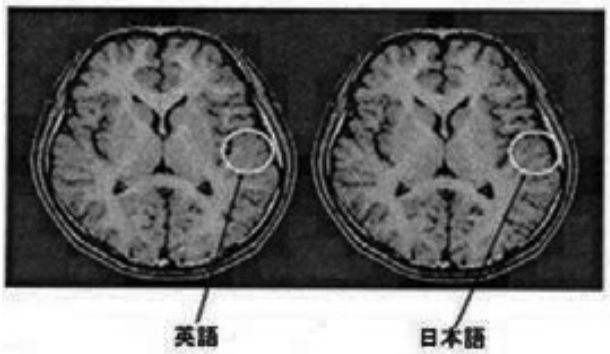


図3

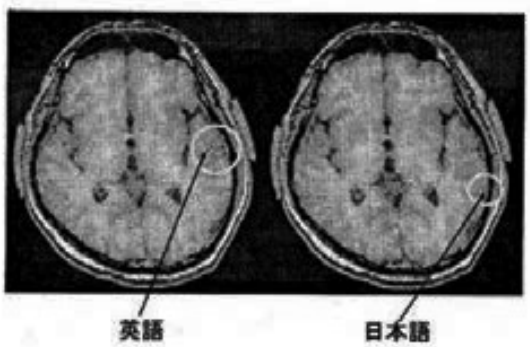


図4

この画像では左脳と右脳が逆に映っており、丸で囲んだ血流が増加している部分は言語脳である左脳です。また、英語や日本語の言語音を聴いて内容が理解できるかどうかということですから、血流が増加している部位はウェルニッケ野です。

この実験結果から、英語のニュースを聞いて理解できなかった被験者は、日本語のニュースを聞いているウェルニッケ野の部位と英語のニュースを聞いているときの部位が同じだということが分かります。つまり、日本語を理解するためにウェルニッケ野内に形成された回路を使って、英語を理解しようとしたために、内容が理解できなかったということです。それに対して、英語のニュースを聞いて理解できた被験者の場合は、日本語の回路とは別に英語の回路が形成されていることが図４から分かります。したがって、この実験から、英語を聴いて内容を理解するためには、ウェルニッケ野に日本語の回路とは別に英語の回路を形成しなければならないことが分かります。

また、このことは、ブローカ野に関しても同様です。このブローカ野は言葉を発する際に必要な「文法中枢」として機能します。我々は母語習得の過程で母語の文法を習得するわけですが、２か国語使用者の場合にはブローカ野に母語の文法回路とは別にもう１つの回路が確立されており、２つの回路を使い分けて言語活動をしていることが明らかになっています。次の図５は、母語が英語で第２言語がフランス語の被験者のブローカ野の状態です。

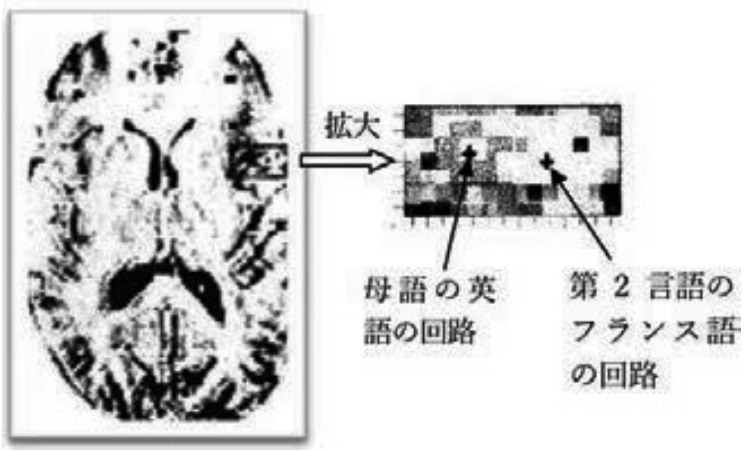


図5　(Kim et al. (1997: 171))

上記のことから、英語を聴いて理解できる、また、英語で話せるようになるためには、左脳のウェルニッケ野とブローカ野に母語の日本語の回路とは別に英語の回路を形成しなければならないわけです。

基本的なこととして、言語話者によって、どのよう音を「意味のある音」つまり「言語音」として聴くかが違っています。そしてこれは、生まれてから9歳位までに使用していた言語によって決定されることが分かっています。ヒトの言語脳は左脳にあり、左脳で聴く音を言葉として認識します。日本語話者は母音と子音 + 母音のセットを言語音として左脳で聞きます。それに対して英語話者は子音 + 母音のセットと子音 + 母音 + 子音のセットを言語音として認識します（角田（2016）参照）。このことを整理すると以下のようになります。

（2）日本語話者 : 母音（**a,i, u, e, o**）と子音 + 母音のセット（**ka, ki, ku ke, ko,** 等）を左脳で聴きく。そのため、特に無声子音（**p, t, k, f, θ, s, ʃ, h**）である「息の音」は言葉の音とは認識しない。

（3）英語話者 : 子音 + 母音のセット（**key /ki:/**（**CV**）など）と子音 + 母音 + 子音のセット（**book /bʊ̈k/**（**CVC**）**, cat /kæt**（**CVC**）など）を左脳で聴く。このため、無声子音（**p, t, k, f, θ, s, ʃ, h**）である「息の音」も言葉の音として認識する。

（濱田（2019）参照）

したがって、英語を聞いて内容が理解できるようになるためには、英語の言語音を習得しなければならないわけです。

言語情報の処理は、耳から音が脳内に取り入れられ、左脳の聴覚野で処理された後、ウェルニッケ野に情報が送られ、「意味のある音（言語音）」であることが認識されると、その情報が角回・緑上回に送られて語彙的な意味処理がなされます（山田・酒井（2017）参照）。ここで問題となるのは、どのようにしてウェルニッケ野に英語の言語音の回路を形成するかということです。そこで次節では具体的なトレーニング法について述べます。

3. アメーバ音読トークのメカニズム（理論編）

従来の日本の英語授業は、「読み・書き・聞き・話す」の 4 技能がそれぞれ独立し、異なる教材を使用して行われており、特に、「話す」活動は不十分なままと言わざるを得ません。

また、言語教育における適正なクラスサイズにも問題があります。新見（2021）によると、教育的効果はクラスサイズに左右されると述べています。外国語のクラスサイズを欧米と同じように 20 人以下にするには多くの時間と国家的な法整備にさらに国家予算を含む改革が必要です。

このように構造改革も必要ですが、現在のクラスサイズで、授業効果を高めるためには、確かな理論に裏打ちされた教授法の開発が重要な課題と言えます。小稿で主張する「アメーバ音読トーク」という手法はこのような状況を打開するために考案されたものです。

また、「理解・内在化・発信」の言語習得プロセスは、Gass & Selinker（2001）の「気づき」の認知プロセスを重視し、インプット仮説とインタラクション仮説を統合した第二言語習得モデルを元に今井（2012）が提唱したものです。

このメカニズムでは、授業内での活動は、左方向から右方向へ展開していきます。下記の図のように「理解・内在化・発信」の言語習得の基本理念に基づき、各具体的な活動を行います。[2] この理論に基づき、アメーバ音読トークの活動の流れを図示すると以下のようになります。

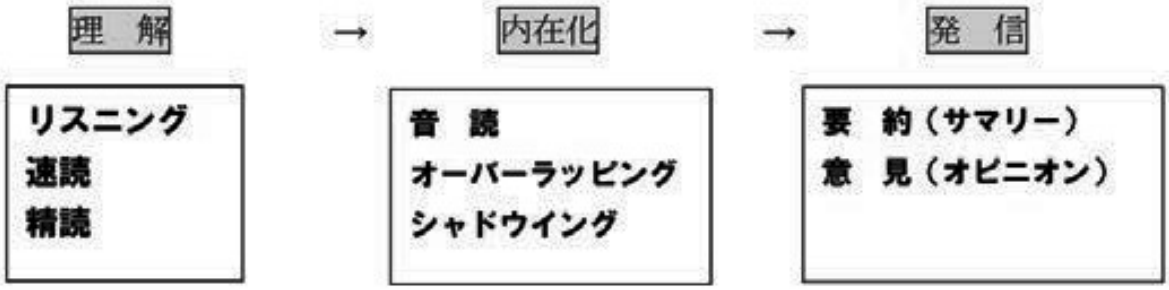


図6

2　廣森（2022）は第 2 言語習得理論からこの基本理念を述べています。

言語を習得するには理論的確証のある手法を行わなければ効果は見込めません。本プログラムは第2言語習得の3原則である「理解・内在化・発信」活動に基づいています。実際に使用する英文は150~300語程度の英文です。初級では実用技能英語検定3級程度、CEFRのA1～A2レベルの英文を使用します。教材は学習者のレベルに合せて向上させることもレベルを下げることも自在です。以下では、図6で示した項目について具体的にそれぞれの理論的枠組みについて述べます。

3．1　理解をするための活動

3．1．1　リスニング

ヒトは母語話者となる過程で母語となる言語音のリスニングが不可欠であることは言うまでもありません。また、このリスニングでは、自然な音源を聴くことがともて重要で、自然な発音と速度の英語を聴くことで、学習者が英語の言語音を聞き分けるようになるのが目的です。第2節で述べたように、私達の母語の日本語は「母音」と「子音＋母音のセット」を意味のある音とし認識します。ですから英語の「子音＋母音＋子音のセット」は言語音としては認識しませんので、英語を聴いても解らないということになってしまうのです。また、リスニングをしながら内容を理解するためには、文頭から順に句単位で理解できるようになることが不可欠です。この意味からも、このトレーニングは、言語理解の初期段階として英語の特徴的な音韻システムの習得し、英語でのコミュニケーションの基礎が確立するために極めて重要です。[3]

3．1．2　速読

ここでの「速読」は、文頭から句の単位で順に理解することで、リスニングした英文の内容を理解する活動です。この速読により、学習者は英語の句の単位を理解できるようになり、英語の文法が確立することに繋がります。

3　石川（2005）は、リスニングでは、英語話者の自然な速度の音源か、句ごとにポーズを入れた音源の有効性を論じています。

速読において、学習者は英文を黙読しながら、内容理解が進みます。内容理解は英文内容の認知が進むことで理解に到達します。このことについて、門田（2007）は、人は黙読するときも単語のつづりを見て、長期記憶にある情報の中から、その語のつづりを検索し、心の中でその語を音声化してから意味を理解することを明らかにしています。

3．1．3　精読

この「精読」では、文構造や文法・語法の知識も総動員しながら意味内容を取り込みます。ここで日本語での理解が補助的な役割を果たし、英語での理解につながっていきます。このメカニズムを図示すると以下のようになります。つまり、「アメーバ音読トーク」のメカニズムでは、実践矢印で示されるように、英語で内容を理解するのが目的ですが、それを補助するために母語である日本語を介在させることで、正確に理解するということです。第一言語（L1）が補助的な機能を果たすことを破線矢印で示しています。

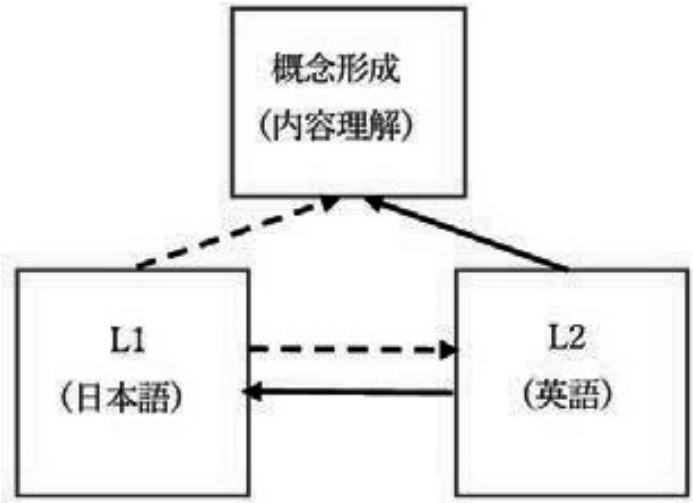


図 7

また、この「精読」によって、日本語と英語の違いを認識できることで英語の理解が深まります。たとえば、日本語は「主語」が不明確な場合もありますが、英語は「主語＋動詞～」が基本です。また、日本語は「名詞＋後置詞」で句の単位を形成しますが、英語は「前置詞＋名詞」で句の単位を形成します。こうした違いの認識は極めて重要です。

3．2　内在化するための活動

3．2．1　音読

言語学習では「音読」は非常に重要です。なぜなら、ヒトは母語を修得すると、外国語の音を「意味のある音（言語音）」と認識できなくなってしまうからです。そのため、**book /bʊ̈k/** は「ぶっく」というように /k/ という無声子音に /u/ という母音を付加することで、「意味のある音」として認識するのです。

この音読では、英語の音をできるだけまねるようにトレーニングすることが重要で、左脳のウェルニッケ野に英語の言語音の回路を形成することが英語学習では必要なわけです。

また、鈴木（2009）は、文章理解を速く行うにはそのプロセスの高速化が必要であり、多様な方法で繰り返し行う音読はそれを可能にすると述べています。「アメーバ音読トーク」のトレーニングとしての「音読」では、自己スピードでの音読・センスグループでの音読・センテンス毎の音読・オーバーラッピングをしながら、ネイティブの音声と自分の音声を比較することで、自己音声を修正し、正しい音を発生するようになります。学習者自身が正しい音声で音読できれば、その音が示す英語を正しく認識することが可能となります。高山（2020）が述べているように「発音できれば、聞き取れる」という言語習得の基本をマスターすることになるわけです。

3．2．2　シャドウイング

大縄（2018）は、シャドーイングの練習によって英文復唱力が向上し、このことは、音声知覚力と構音スピードの向上を意味すると考えられると述べています。

シャドウイングでは、カンマやピリオドまで一気に処理していくことになりますが、この時の脳内活動は、音と文と意味内容が瞬時に脳内で処理される活動になります。この脳の状態では、言語音を聞きながら、理解し、音声にして発話するという複数の脳内活動が行われます。自然な速度で聞こえてくる英語を文頭から処理し、音声化する活動は、句ごとに英語を認識するために不可欠なトレーニングです。

続（2015）は発音の声調やアクセントからいえば、英語は強弱言語、日本語は高低言語であることを指摘しています。英語に関して言えば発音の強弱が問題で、対して日本語は高低が問題です。強弱は振動の波形の幅の問題であり、高低は振動の周波数の問題ですから、それら物理的な問題は別にして、発音教育の段階では強弱の問題も実は高低の問題にかかわるので、留意しなければならないと述べています。

この音の種類の違いが日本人の音声理解における一つの壁になっていますが、さらに、英語音はリダクション（音の変化・脱落）・リンキング（音の結合）・アシミレーション（音の同化・畳化）によって、書かれている英文の一つ一つの英単語の読みは変化しています。この変化に対応しなければ、聞いてもわからない状態になります。そこでの解決策の一つが、シャドウイングであると言えます。

シャドウイングすることで、その音を聴き、その音を自分で再現することが可能になります。通訳者が行ってきたこのトレーニング方法に解決策があったのです。シャドウイングは発話活動のみならず、リスニング強化の近道になる解決策と言えます。[4]

4　長年、日本人はリスニングできない問題の解決策を模索してきました。このことに関係して、高山（2020）は、「発音できれば聞き取れる」と主張しています。

3．3　発信するための活動

3．3．1　自分の英語で要約（Summary）

英語の内容を英語で要約する作業は、どの程度内容を理解できているかを学習者自身がチェックするために必要な過程であり、それに続く「内容について意見を述べる」基盤としても重要です。

この内容の過程では、学習者は英語の文法や語法に意識を向けることにもなり、英語力の向上につながります。また、この要約作業では、自己の語彙・語法を総動員することになり、この活動で重要なのが「言い換え」です。このことに関して、佐藤（2015）は次のように述べています。

(4) 英語による言い換えは、一見難しそうに聞こえるが、walk であれば「go slowly on foot」くらいの言い換えで良いのである。大切なのは英語の循環を学習者の中に作ることである。そうして英語の言い換えを思い浮かべながら頭の中で英文を作ろうとすることが「英語で考える」ことなのである。

（佐藤（2015：10））

この「英語で考える」活動を行うことで、アメーバ音読トークの発信活動で英語を話せる学習者が構築されているのです。

3．3．2　自分の意見（Opinion）を述べる

日本語話者の中には、英語の読み書きの能力は高いレベルでも、英語を話すのが苦手という人もすくなくありません。この原因の１つは、話題に対して意見をもつということができ難いということもあります。これは、幼少から意見を求められる欧米の教育スタイルは、自分の意見に対してその理由を明確に発言するところからその論理性を高めることができますが、日本にはそのような環境にない場合が多いということも考えられます。佐藤（ibid.）によれば、欧米では子供たちが間違った英語を話すとすぐに修正される活動が家庭内で行われてきたわけです。

この話題に対して意見をもつということができるということが、実は、英語

で話すことの向上に繋がるのです。言語的な視点から見た場合、英語という言語力育成の最終目標は、英語で意見を言うことであり、「やり取り」が完成することです。討論が、論理的に展開することが可能になれば、言語的なコミュニケーションの目標は到達していると考えられます。

4. アメーバ音読トーク（実践編）

4．1　理解をするための活動

4．1．1　リスニング

初見の内容の英文のリスニングをすることで、内容理解を行います。「リスニングは１度だけ聞くこと」を告知したうえでリスニングすることで学習者の集中力は向上します。

このリスニングを行った後に必ずどの程度理解できたかをモニタリングします。理解度を 30%，50%，80% に分けます。そして、リスニング終了後、手を挙げてもらいます。そこで、教室の学習者の理解度を確認します。この作業がとても重要です。というのも、学習者本人が自分の理解度を判定することで、メタ認知することが可能となります。

自分が理解した内容について自己認知することで、自己認知の到達度をセルフジャッジできるようになります。この認知が進むことで自分の英語学習において、自分がどの程度理解しているかを常時、自己認知することが可能になり、自分が理解しているか否かを自己評価できるようになります。

どの作業においてもこのメタ認知機能は働き続けることになり、自己判断で自己理解が進むことになります。その結果、不十分な結果が伴う活動では、さらに内在化のための活動を行う目安になるのです。

4．1．2　速読

英語音の特徴の理解が十分に行われない場合、音が示す英語の意味内容の理解もスムーズに行われないことになります。ここでは、自分の理解度を自己判断することが重要となります。つまりメタ認知することで、自分の理解力を

正しく判断します。具体的には理解度を 30%、50%、80% の 3 段階に分けて自己判断します。このメタ認知を行うことで、自分の理解度を冷静に判断します。

ストーリーなどは具体的な登場人物が様々な物語を展開する映像が学習者の脳内で展開するのです。そこでは日本語は介在しません。英文を読みながら、映像が浮かぶようになる段階を「自動化」と定義します。（今井（2020）参照）

英文を速読しながら、その意味内容がイメージできれば、自動化が進むのです。速読での自動化の進み方は、発音、文法、語彙の十分な学習によって、英語学習の基礎が出来上がり、その基礎力の上に更なる語彙力・表現力・言語的経験値が豊かになることで総合的な「英語力」が潤沢に構成されることになります。

4．1．3　精読

英文を精査しながら読み込んでいき、内容理解を進めます。この場合、文の前後関係にも気を配り、状況から判断して、理解を深めていきます。この際、重要なことは、日本語を介在するところにあります。細かいニュアンスの理解には個人差がありますが、いつどこでだれが何をどうしたのかという大まかな内容を把握することが可能になります。

さらに学習者本人が理解できていない箇所にスポットをあて、どこがわからないのかを理解することにつながります。

この精読による理解の深化は文法・語彙の潤沢な基礎力を基にスムーズに進みます。ただ学習者によって、理解や内在化に下がる場合は、もう一度基礎的な活動を指示し、修正が可能です。理解・内在化の構築がなされた後で、発信活動は可能になります。

日本語は英文の日本語訳を使います。日本語を参照することで、英文の理解を深めます。英文の語彙・表現・構文構成のシステムを日本文の理解と共に進めていきます。日本文を使用することで、英語の仕組みを理解できます。この英語の仕組みは英文法の基礎と言い換えることが可能です。精読という理解の活動では、この英語の仕組みの理解こそ重要です。このことに関して、佐藤（2015：2）は「母語と構造が大きく異なる外国語を学ぶ場合には、学習する外

国語の仕組みをある程度把握することが外国語学習の近道なのである。」と述べています。

5. 内在化するための活動

5. 1　ネイティブの音声を使っての音読

音読は一文をそのまま音読することが望ましい。ただ英文によっては長いものもあります。その場合にはカンマやコロンで息継ぎすることが可能です。センスグループで意味ごとに切って読むことも初級段階で行われていますが、これはあくまで初級段階でのことです。ネイティブのスピードを目指すことで、英語力は向上します。ゴールは学習者の実力のやや上（i+1）が適正です。その意識がその領域に到達するものになります。オーバーラッピングの活動は特に効果的です。

5. 2　ネイティブの音声なしでの音読

学習者自身のスピードで音読することで自己モニタリングの精度が増します。また、正確に音読できない箇所も明確になるのです。スピード調整も可能で、速く読めない箇所の確認も可能となります。自分で読めない箇所あるいは読みにくい箇所が明確になり、自己調整が可能となります。自分の音声を正確にモニタリングすることで、音の違いとともに正しい音への欲求も増えます。また、自分の授業実践の経験から鑑みると少なくとも複数回音読することで、内在化が進みます。音声と意味内容がリンクしていきます。音読をすることで、ネイティブとの音の違いにも気が付くのです。

学習過程で自分が、どこができないのか明確になればそこを中心に自己練習も可能になります。このプログラムの特徴の一つはメタ認知による自己能力の正確な理解とその不足している箇所の修復のための学習活動です。

自分が、何ができて、何ができないのかを知ることは、次に必要な学習内容を明確に自己認識可能になるという学習の方向性を正しいものにする上で非常に有効です。本稿第２章の内容からも音読の効果は明らかです。

5. 3　シャドウイング

文字を見ない状態で音読すると音に集中できます。また、聞き取れない箇所、理解が不足している個所など十分に処理できていない箇所を明確にするメリットもあります。この活動を行う際はわからないところはとばすという大胆なルールで行うことが効果的です。

基本的なルールは即座にまねること、小さめの声で行うこと、緊張せず、リラックスしてまねることです。また、カンマとピリオドだけで切るようにすることが重要です。文章は一気にシャドウイングした方が効果的です。なぜなら、実際の英語は待ってくれないからです。速さに慣れることも英語でのコミュニケーションをスムーズにするためのファクターです。

さらにシャドウイングが可能という事は英語を発話する活動に繋がります。発話することでリスニングができているかという点も確認可能です。正しいリスニングの自己チェックも行える点がシャドウイングの更なる効果を上げているのです。この通訳者が主に行ってきたトレーニング方法が広く一般化してきている現代では、シャドウイングすることで「音・文字・英文構成・表現」を統合した文構成の理解・発信まで繋がります。

シャドウイングできる学習者の英語力は向上します。シャドウイングすることで日本語と英語における大きな差異を克服できます。

6. 発信するための活動

6. 1　自分の英語で要約

理解した内容を英語で発話します。本文と同じである必要はありません。自分の英語で表現するところが大切になります。助詞が存在しない英語には語形変化とともに文法的な基本ルールが存在し、そのルールを守らなければコミュニケーションは困難になります。

理解した内容を脳内でまとめ、音声化して発話することは speaking 力向上につながります。思考した内容を英語で発信するには、脳内で思考内容を英語に直して音声化する一連の作業が最初はゆっくりと機能し、徐々にその処理速度

は速くなっていきます。その思考内容から発話までの脳内活動が早くなればなるほど「スムーズな活動経路」が完成されます。そのスピードが速くなる最高の状態に近づくと「自動化」のレベルになります。今井康人（2009）では、「言語処理の自動化」と定義し、英文を頭から理解していることになるのですと述べています。さらに今井（2020）は「理解」「思考」「発話」のサイクルが「自動化」することで、コミュニケーションは潤沢に、また活発に機能すると述べています。

日本人の英語のコミュニケーション力の不足は社会的な問題になるまで、肥大化してきました。この問題を解決することは容易ではありませんでした。一つの要因には英語学習の基礎となる「発音・文法・語彙」の３分野のうち、文法と語彙にばかり教育の矛先が向いてしまい、発音指導が体系化されて教育されないところに問題がありました。

全く音の違う言語において、第１に行うべきは発音指導です。その中でフォニックスにその解決策が求められてきましたが、フォニックスで網羅できるのは英語全体の 30% 程度であるため、解決策とはなっていないのです。文字を中心に英語を学ぶと文字と実際の発音の違いに翻弄されてきました。

さらにローマ字発音を学ぶことで、さらに読み方に支障をきたしてしまうのです。なぜ、ネイティブスピーカーは文字を英語らしく発音できるのかに疑問が残るのです。アルファベットの文字の読み方とその文字の実際の発音には大きな違いがあります。b はビー（/bi:/）ですが、実際の音は「ブッ（/b/）」です。このことは第２節の英語と日本語の言語音の違いにあるのです。母音と子音の種類の違いがこのような音の違いの種類の多さを引き起こしています。特に英語の子音の種類の多さは日本語とは比較にならないのです。

つまり、英語学習の初期段階から発音指導が重要であり、英語音を出せるかどうかが聞けるかどうかを左右しているのです。この発音指導の体系化と普及こそが今後の日本人の英語学習の肝を握るのです。

さらに、自分で意見を言う発信活動の不足が日本人の発話力を低いままにしてきました。内容の充実度に関係なく、まず、発話する行為こそが重要です。自分で考えて英語を発する時にこそ、英文法はその力を発揮します。英語は単

語の羅列です。その基本的な法則やルールを学ぶことで正しく英語を使えるようになります。

この自分で意見を話す活動こそ、日本人の英語力向上の鍵を握っています。

6．2　自分の意見を述べる

日本の英語教育の最終的な目標は英語によるコミュニケーション能力の向上であることは学習指導要領の内容からも明らかです。その際には、自分の考えを英語で述べることが必要になります。しかし、自分の意見を述べることは英語学習者のみならず、日本人にとって簡単なことではありません。

英語で意見を述べることにおける注意点は、実は英語の論文を作成する際の注意点と類似しています。このことに関係して、中山（2024）は英語論文作成の際の注意点を次のように述べています。

(5) a. まずは論理
　　b. 英語の発想で
　　c. 明確な文章を書く

(4a-c) は、自分の意見を述べる際にも重要な視点になります。まず、何を言いたいのか明確にすること、つまり結論を明確に述べるということです。日本語では最初に理由を述べて、結論を最後に述べる傾向があります。この論理の中で生活している日本人にとって結論から述べることはかなり意識しなければできません。したがって、理由付けは結論の後に述べて、また、話す内容の一文が長くなりすぎないように注意します。

この英語の発想について、中山（ibid.）は次のように提唱しています。

(6) a. 結論が先、理由は後
　　b. はっきり言い切る / 曖昧はダメ

この２点を意識して意見を述べることが大切です。特に英語表現では、時制

や主語を明確にして、受動態ではなく能動態を使用することで明確な内容を表現することができます。最初に結論を伝えて、理由付けを後にするだけでその論理構成は整理できます。

更に、明確に意見を述べるために、中山（ibid.）は事実と推論を分けることを提唱しています。また他者の意見と自分の意見を明確に分けることも重要であると述べています。以上のポイントを押さえることで、理解されやすい英語となります。

7. 最終的なライティング活動

口頭で発表した内容を Writing することで 4 技能のすべての活動が完成します。この Writing 活動では英語で要約や意見を発表し、その内容を英文にします。発話した内容を文字で可視化し、英文にします。Writing 指導は教育現場では非常に困難を極めています。というのは添削指導が一般的な指導法になっており、教員個人の負担が大きいことが問題です。そこで解決策に浮上してきた指導法が、AI の活用です。この AI の活用により、個別添削による英文修正が可能になってきています。

Writing 指導においては「正確性」「Accuracy」と「流暢さ」「Fluency」の両面の指導が必要になっています。今井（2020）ではこの両面の指導の強化が Writing 指導をより効果的にすると述べています。さらに今井（ibid.）は、具体的な指導法を提示しています。「正確性」「Accuracy」を鍛える指導法を「同時自己添削英作文」「Simultaneous Self-Check Composition」と命名し、「SSCC」と呼んでいます。（以下「SSCC」とする。）

この「SSCC」では、指導者が日本語を伝え、学習者はその日本語を英文に書き出します。その英文を指導者が提示した英文に基づいて自己添削します。この学習方法で飛躍的に「正確性」「Accuracy」が向上することが期待できます。

また、「流暢さ」「Fluency」を鍛えるためには「連鎖意見英作文」「Chain Opinion Composition」があります（以下「COC」とする）。この「COC」では、あるテーマに沿って自由に英文を書きます。5 分後、書いた紙を教室内で

ローテーションして、さらに5分間意見を英文で書きます。この作業を合計4回繰り返します。合計20分間、学習者は集中して英文を書き続けます。Writing力が向上するにしたがって、学習者の書く量は増加します。この学習方法は1週間に1度行うことで、1年後には非常に英語の「流暢さ」「Fluency」が向上します（今井（2020）参照）。

アメーバ音読トークが発話までの一連の英語学習活動であるとすると、最終的にWritingまで行う活動を「スーパー・アメーバ音読トーク」と命名することができます。授業数の多い学校現場では、この「スーパー・アメーバ音読トーク」の実施が学習者の英語力をバランス良く、大きく向上させることになると考えます。

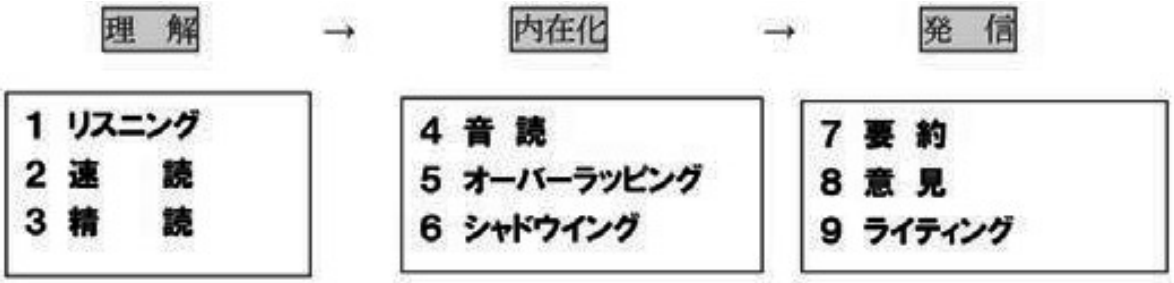


図8

8. 事例報告

この節では、これまで主張してきた「アメーバ音読トーク」の有効性について、事例に基づいて検証します。

ジョイ・イングリッシュ・アカデミー（浦島久主宰）における音読クラスの実践からもその有効性が高いことが示されています。特に2022年に実用技能英語検定（以下英検と表示）2級程度の社会人（42歳男性）がこの音読プログラムのみを行いながら、英検準1級に2年間の学習期間で合格しました。その後、4年後に英検1級に見事合格しています。特筆すべきは、この男性が卒業した大学の専攻は経済学部で、海外での生活経験はなく、英語とは無縁の仕事に従事しているということです。この事実からも本プログラムが有効であるこ

とを示しています。

また、浦島は2023年度北海道鹿追高校において高校1年生37名に対して英語の授業実践を行いました。そこでは、アメーバ音読トークを中心に実践し、英語の発話ができる生徒を輩出しています。ペアワークだけではなく、4人でのディスカッションも行われています。話す活動が不足していた日本の英語の授業に新たな潮流を生み出しています。（下記グラフ参照）

さらに、札幌大学における英語教育の授業においても、アメーバ音読トークが実施されています。2023年度の基盤英語Ⅰのクラスでは経済学専攻の22人に対してアメーバ音読プログラムが行われ、春学期末テスト平均点が9割を超えました。英文に対して、理解・内在化・発信活動を潤沢に行った結果です。

立命館高校（京都府長岡京市）において、アメーバ音読トークの手法を使用して授業を行いました。期間は2016年4月から2020年3月までです。この手法を受講した生徒たちの平均偏差値は、この手法を使用していない学習者よりも向上したという成果を得ました。使用したテストは授業者（今井）が作成したオリジナルテスト、全統模擬試験（河合塾作成）、進研模試（ベネッセ作成）の3種類です。どのテストにおいてもアメーバ音読トークの手法を使用した学習者の平均点や平均偏差値は向上しました。

オリジナルテスト（2018年7月実施）の平均点数は73.5点から76.4点に向上しました。さらに、2種類の模擬試験の平均偏差値は、2018年7月実施した数値と2015年7月実施したものを比較すると2.4ポイント向上していました。

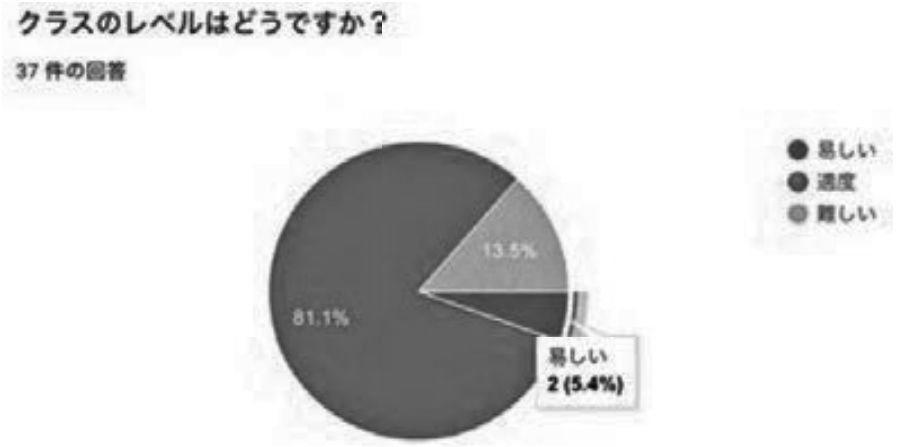
これは、発信活動の充実で授業での発話活動が活発になり、学習者が主体的に英語学習に取り組むようになった成果です。やはり、アメーバ音読トークが有効であることを示しています。

この指導方法の特徴の一つに、どのような学習者にも応用できる対応性があげられます。学習者の状況に合わせて、各活動の進度や深度を変えることが可能です。例えば、基礎力が十分といえない小学生の学習者に対しても理解が不十分であれば、その時間を十分に使い、理解が深まってから、次の活動に移行することが可能になります。また、音読の状況に合わせて、シャドウイングの導入や回数に変化をつけることも可能になります。

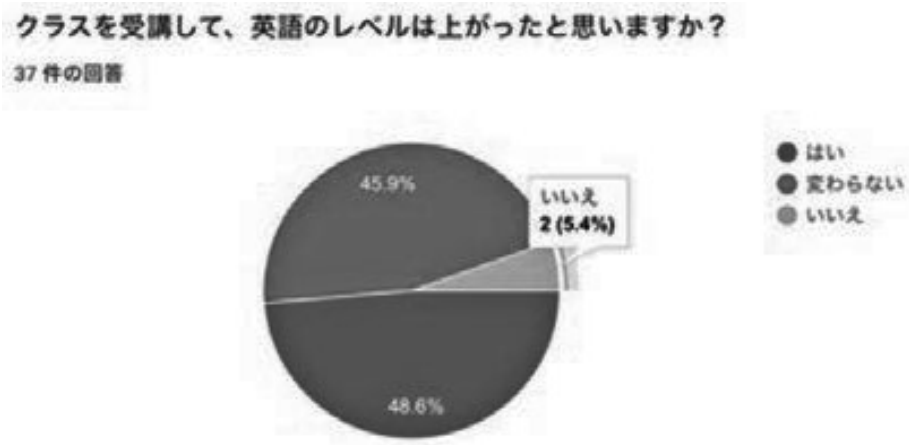
つまり、理解・内在化・発信におけるそれぞれに必要な練習量を変化させることが可能になるのです。

学習者の英語の状況に合わせて指導することで、その英語力は向上しやすくなります。この指導法が日本各地の中学校や高等学校で行われることで日本の英語教育は格段に向上することが期待されます。

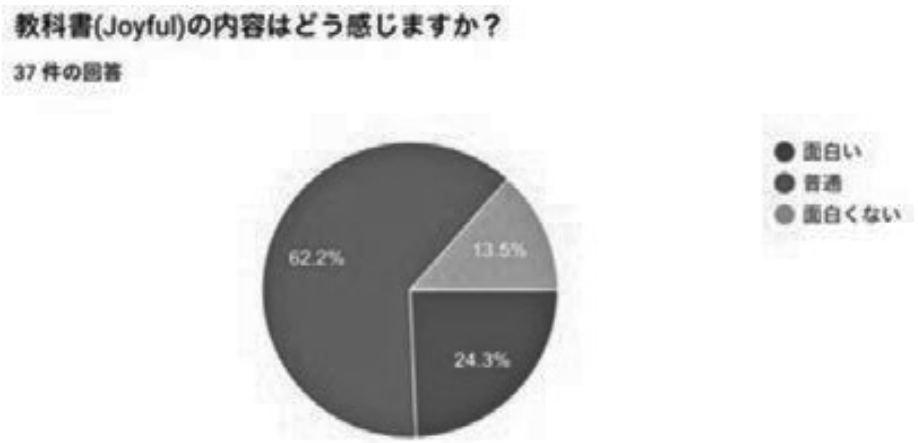
下記の統計調査は2023年度北海道（立）鹿追高等学校において浦島が授業者として年間17回の特別授業を行った後に実施されたアンケート調査の結果です。対象生徒は全日制普通科1年生の37人です。



クラスの81.1%の学習者がクラスのレベルは自分に適切だと答えています。易しいと答えた学習者が5.4%いました。また、難しいと答えた学習者は13.5%になりました。授業レベルは学習者に適切であると言えます。



このクラスを通じて自分の英語力が向上したと答えた学習者は 48.6% になりました。この数字が意味するところは変わらないと答えた学習者よりも 2.7% 上回りました。自分の英語力が変わっていないと答えた 5.4% も存在しています。アメーバ音読トークに対して前向きな意見は約半数の学習者に支持されたと言えます。



教材の内容によって興味関心も変化があると仮定できますが、今回の調査では、教科書としてのテキストに対する学習者の印象は普通という回答が 62.2% になっています。面白いと感じた学習者は 24.3% になっていますが、英語のレベルが上がったという学習者 48.6% になっている数値と比較すると教材の内容と教え方の違いでは、教え方が効果的であれば学習者の意識にも一定の好影響が認めることが理解されます。

以下は受講者からの感想です。

(2) a. 毎回違う人とペア学習をしたいです。
b. 今持っている単語力を活かして話をするのではなく、各章に合わせたよく使える話法を教えてほしいです。
c. 全体的にリスニングの力がついていると感じた。
d. 頭を使うと思っている。
e. 話し合いが活発にできている。
f. シャドーイングやディスカッションから一見どんな能力が育つのかわ

からなかったのですが、ちゃんと英語の能力が上がった気がしてこの授業を受けて良かったなと思っています。

g. 英語力が上がっているのかわからないけど楽しい。
h. もっと joyful（テキスト）の内容をやりたくなるほど良い授業でした。
i. 楽しく授業に出席できた。
j. 英語で話す時に話せる人とあまり話せない人がいた。
k. 少し英語が好きになりました。ありがとうございました。
l. 他の人と英語でたくさん話せるのが楽しいです。
m. 普段リスニングの練習はしないので、このクラスでできるのはとてもいいなと思います。
n. 色々な人と関わる機会が多くて、良いと思いました。
o. 気楽にわからないところを聞けるクラス
p. 英語で意見交流できるところが良いと思う。
q. 英語に触れる機会が増えて良かった。
r. 難易度もちょうど良く、分かりやすい！リーディングの速度が上がった気がする！
s. 良かった。
t. 進むのは速い

様々な意見があります。個人個人の英語力は異なっています。特に、リスニングが良くなったという意見は特徴的です。なぜなら１回しかリスニングしないにもかかわらず印象に残るということは、集中していることも要因ですが、音読活動によって学習者自身が音読できる事がリスニングに好影響を与えている可能性があります。また、学習者が一つ一つの活動に集中し、それぞれの活動が有機的につながり、一連の活動から「英語学習が楽しい」という意見に繋がっています。

また、特に印象的な意見は「頭を使うと思っている」という意見です。現代の英語の授業ではコミュニケーション活動を重視していますが、テストでは筆記テスト中心で知識を問う評価方法が主流になっています。その中で授業中に

自分の頭を使うという声は英語学習者にとって目指すべき活動であり、理想的な授業とも言えます。

9. まとめ

アメーバ音読トークは、これまで日本で行われてきた英語の授業に変革をもたらす可能性を論じてきました。これまでの日本では、Listening, Reading, Speaking, Writing の各活動がそれぞれ別々の英文を使用して授業が行われてきました。そのため常に内容の違う英文の学びを繰り返す形で授業が行われてきました。

小稿で主張するアメーバ音読トークでは、最初から学んだ英文を教材として4技能の各活動を行い、英文が模範として学習者の脳内に理解・内在化され、その内在化された英文を使いながら学習者は、発信活動を行います。英語を話すには、内在化された模範英文が起点となって、発話しやすくなります。この点が、今までの英語学習で実現できなかった点です。学校の教科書も理解や内在化で終了してしまう、あるいは、発信活動の量が十分ではない状態で次のレッスンに進まざるを得ない状況になっています。

佐藤（2015）は日本の現状について次のように述べています。

(3) 現代のような、国内にあっても外国の人びとと直接話し合う機会が頻繁に起こりうる時代にあっては、訳読式の英語教育が時代遅れであることは明白である。発信型の英語を学ぶ必要がある。そのためには日本語と英語の違いを理解し、英語の論理にそってダイレクトに英語を理解していくことが求められる。

（佐藤（2015:10））

内在化された英文を使用し、要約や意見を発話していくことで非常にスムーズにすべての活動が繋がります。さらに発話した内容を文字化することによって Writing 活動が成立します。この時点で音・意味・文字の一体化（今井

(2009) 参照) がなされるのです。

アメーバ音読トークのシステムにより、日本の学習者がスムーズに英語を学び、バランスの取れた活動を行い、飛躍的にその英語力を向上させることを可能にする画期的な学習メソッドであると主張します。

言語習得は幼少期から親の存在が非常に影響を与えています。これは、言語習得は「まねる」という活動を基本に、子供が親の音声を、反復修正を繰り返しながら言語習得が進みます。

成長した日本の英語学習者に、幼少期の言語環境を同じように再現することは難しいのです。ただ、その言語活動のように英語学習者が話す場面において、何を基に話すか、そこに注目すると話すための土台になる英文を理解・内在化して、その内在化された英語を規範言語として話す活動を行うと非常に容易になります。その過程はまるで幼少期の言語学習における親の模範的な英語を基に発信活動するモデルと似ています（佐藤 2015 参照）

アメーバ音読トークは、基本的な言語習得の規範に基づいています。内在化された英語を使いながら、シャドウイングしていくことで、音・意味・文字が一体化して学習者がネイティブと同じ速度で、音声反復することが可能になります。シャドウイングが可能になることで英語特有の音の習得が進みます。音声習得が、その後の要約における英語の発話を促進するのです。

さらに、意見を英語で発話する際に、オリジナリティ溢れる学習者独自の内容を創造することに繋がります。この活動は自由に英語で表現する活動になり、英語を使える学習者形成に繋がるのです。言語習得の最終的な段階は自由な意見交換です。つまりディスカッションができるようになることが一つのゴールとなるでしょう。

日々行われている授業の中で、4 技能を潤沢に使えるアメーバ音読トークが実践されることで日本の学校教育に好影響を与えることが期待できます。

授業で触れる英文を理解・内在化・発信し、アメーバ音読トークの手法を使いながら実践されることが日本の英語教育には必要と考えます。

参考文献

Gass,S.M.,& Selinker, L.(2001). Second language acquisition: An introductory course, 2nd Edition. Mahwah, NJ:Lawrence Erlbaum Associates.

Gazzaniga, M. S.（2000）“Cerebral Specialization and Interhemispheric Communication ― Does the Corpus Callosum Enable the Human Condition?” Brain 123, 1293-1326, Oxford University Press, Oxford.

濱田英人（2019）『脳のしくみが解れば英語がみえる』開拓社 .

廣森友人（2022）『英語は“科学的”に勉強しよう！第二言語習得研究からのヒント』 https://www.meiji.ac.jp/ggjs/6t5h7p00003fs1ki-att/a1667373243788.pdf

石川圭一（2005）『ことばと心理』くろしお出版 .

伊藤克敏（2004）「脳の発達・機能と第 2 言語（外国語）修得」『神奈川大学言語研究』26, 97-112.

今井康人（2009）『英語力が飛躍するレッスン』青灯社

今井康人（2012）「授業でいつ output をするか」CHART NETWORK　68 号 2012 年 9 月 .

今井康人（2020）『英文読解 G トレ』（標準レベル・応用レベル）アルク

今井康人（2020）『英語の発信力を強化するレッスン』青灯社

乾敏郎（1997）「文理解過程のネットワークモデル」『心理学評論』Vol.40, No.3, 303-316, 心理学評論刊行会 .

門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモピア .

菊野 雄一郎・李 琦（2020）『言語習得におけるメタ認知の要因についての検討』

Kim KHS, Relkin NR, Lee K-M, Hirsch J.（1997）“Distinct Cortical Areas Associated with Native and Second Languages,” Nature 388, 171-174

中山裕之（2024）上手な科学論文の書き方 https://www.vm.a.u-tokyo.ac.jp/byouri/education/03preeng.pdf

新見哲彦（2021）『カナダと日本の初等・中等教育システム比較』 /Downloads/WasedaDaigakuKokugoKyoikuKenkyu_41_7.pdf

大石晴美（2006）『脳科学からの第 2 言語習得理論』昭和堂 .

大縄道子（2018）外国語教授法としてのシャドーイング活動の効果 ――リスニング力、英文復唱力、プロソディの観点から「石巻専修大学 研究紀要」第 29 号 73―82

Ramachandran, V.S.（2011）*The Tell-Tale Brain,* W.W. Norton & Company.

佐藤秀樹（2015）『日本語と英語の違いを意識した英語学習 ―語順、時制を中心に―』長野大学紀要 第 37 巻第 2 号 1―12 頁（27―38 頁）2015.

鈴木寿一（2009）「『音読』こそがすべての基本―音読 指導で生徒の英語力を向上させるための Q&A」（『英語教育』2009 年 11 月号）大修館書店 pp.10-12.

高山芳樹（2020）発音できれば聞き取れる！リスニング×スピーキングのトレーニング 基礎編 単行本（ソフトカバー）– 2020/3/12 Adam Ezard（問題執筆･英文校閲）（著）, 高山 芳樹（監修）, Z 会編集部（編集）.

続　三義（2015）英語と日本語の音声対照研究一日本語発音教育の角度から - 東洋大学「経済論集」40 巻 2 号 2015 年 3 月 .

角田忠信（2016）『日本語人の脳』言叢社 .

植村研一（2009）「脳科学から見た効果的な多言語習得のコツ」『認知神経科学』vol. 11, 23-29.

山田亜虎・酒井邦嘉（2017）「ブローカ野における文法処理」BRAIN and NERVE 69（4）:479-487.